

10 近世研究の動向

関根 達人

はじめに

近世考古学は、研究対象となる時代の特質から本来的に幅広い学問分野と関連を有するが、近年は実際に近世史は勿論、民俗学、宗教学、美術史、建築史、日本思想史、アジア史など多くの学問に少なからぬ影響を与えつつある。また、考古学が「モノ」を研究対象とした学問である以上、高度に発達した物質文化を扱う近世考古学は、研究の方向性一つとってみても潜在的に多くの選択肢を有しており、日本考古学のなかでも多彩な学際的研究が期待される分野の一つといえる。近世考古学は世間に充分認知されている状況とはいいがたいが、近世の考古資料を取り上げた展示会や自治体史も増えつつある。2002年度に刊行された青森県史では、県内50ヶ所の近世遺跡に個別解説が加えられ、近世の考古資料を用いた時代概説、遺物の集成に基づくコラムなども掲載された（『青森県史』資料編考古4 中世・近世）。

近世遺跡の保存・史跡指定では、かねてから話題となっていた仙台城で、良櫓の復元中止と国史跡としての部分指定申請という大きな進展がみられた。日本考古学協会をはじめとする学会や保存運動団体の果たした役割は大きいですが、その原動力となったのは、石垣修復に伴う発掘調査で得られた成果である。

文化庁から出された通知「出土品の取り扱いについて」（1997年）と「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」（1998年）は、近世の埋蔵文化財保護行政にマイナスの影響を与えると危惧されているが、研究の深化とその成果の還元こそが近世考古学研究に携わるものの責務であり、必ずやその努力は、歴史資料に対する国民の理解を広め、埋蔵文化財保護行政全般を下支えする強い力となる。

1. 研究の公開と普及

7月27日～8月25日、名古屋市博物館で「名古屋城下のゴミ事情」と題する企画展が開かれた。具体的な考古資料とその出土状況から、近年流行となっている「江戸のリサイクル事情」の検証を試みた着眼点に加え、考古学の基本的な考え方が見学者に伝わりやすい展示の構成が評価されよう（『名古屋城下のゴミ事情展示図録』）。

10月18日～11月17日、港区立港郷土資料館で開催された特別展「江戸動物図鑑―出会う・暮らす・愛でる―」は、遺跡出土の動物遺存体やイヌ・ネコの墓石、六道銭を副葬したイヌの墓などを取り上げ、大名屋敷における豚肉食から愛玩動物、さらに飼い犬の品種の問題まで多彩な内容であった（『江戸動物図鑑

—出会う・暮らす・愛でる—展示図録』)。

11月2日～12月15日、港区の根津美術館で開かれた特別展「知られざる唐津—二彩・単色釉・三島手—」は、近年の発掘調査成果を踏まえ、これまでともすれば軽視されがちであった茶陶以外の江戸期の唐津(「唐津民窯」)に焦点をあてた点が注目される。西田宏子と東中川忠美により、消費地・生産地双方の資料を基に、江戸前期の唐津の装飾技法が整理され、その年代観が示されている(『知られざる唐津—二彩・単色釉・三島手—展示図録』)。

11月30日～1月26日、瀬戸市埋蔵文化財センター企画展「江戸時代の瀬戸窯」では、江戸時代の瀬戸5ヶ村に関し、各村毎に窯の構造と製品の特徴および変遷が示された(『江戸時代の瀬戸窯展示図録』)。

2月22日～5月11日、土岐市美濃陶磁歴史館では、第15回土岐市織部の日特別展「織部の流通圏を探る」が催され、消費地遺跡出土の資料を基に東日本における織部の流通状況が示された(『織部の流通圏を探る展示図録』)。

このほか2002年度は、香川県歴史博物館「高松城下を掘る」、徳島市立考古資料館「発掘が語る徳島城」などのように、考古学の成果に基づき構成された城下町単位の企画展が目立った。その反面、江戸開府四百年ならびに開館十周年を記念し、江戸東京博物館で大々的に開催された「大江戸八百八町」展には、江戸遺跡研究の成果がまったく盛り込まれていなかった。考古学の成果が大きな役割を担えただけに残念である。

2. 研究会・シンポジウムなどの動向

5月26日、日本考古学協会第68回総会では、渡辺晴香他「岸和田城跡二の丸発見の鍛造土坑をめぐって」、北野信彦他「赤色顔料の生産と消費に関する基礎的調査(1)」、桜井準也「鍋被り葬研究の意義」、原祐一他「近世遺跡から出土したキセルの研究」、森本伊知郎「容量からみた肥前、瀬戸磁器端反碗の規格性」、谷畑美帆「近世埋葬遺構出土人骨に見られる変形性関節症」、大橋康二他「インドネシア、ソンバ・オブー要塞跡出土の陶磁器」の研究報告があった(『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』)。

7月20・21日、「四国・淡路の陶磁器Ⅱ—理兵衛焼と京焼—」というテーマで第4回四国城下町研究会が開催され、理兵衛焼について高松城ならびに江戸高松藩上屋敷である飯田町遺跡出土資料の検討、京・信楽系陶器との比較、生産技術や操業形態に関する近代化の検討などが論じられた(同研究会資料)。

12月7・8日、「近世後期の陶磁器」というテーマで、第14回関西近世考古学研究会の大会があった。

1月26日、第4回考古学シンポジウムでは、東京大学埋蔵文化財調査室などによる本郷構内加賀藩邸跡検出の宝永火山灰に関する研究発表と、東北大学埋蔵文化財調査研究センターなどによる大気サブミリPIXEカメラを用いた仙台城二の丸跡出土遺物の材質分析に関する研究発表が行われた。

2月1・2日の江戸遺跡研究会第16回大会は、「遺跡からみた江戸のゴミ」をテーマに開かれた。江戸の人々によって遺された膨大な「ゴミ」に対し「考古学はどのように立ち向かうべきか」という問いは、まさに考古学の基本的な方法論を再確認することでもある。次年度予定されている続編が期待される。

3. 城郭・城下町など遺跡に関する調査研究

『考古学ジャーナル』493では城郭研究の特集が生まれ、近世初頭に廃絶された奈良県宇陀松山城(秋

山城)跡, 熊本県麦島城跡, 長崎県原城跡の3遺跡が取り上げられた。

江戸関連では、『汐留遺跡Ⅲ』・『尾張藩上屋敷遺跡Ⅹ～Ⅺ』・『市ヶ谷本村町遺跡』(以上, 東京都埋蔵文化財センター), 『明石町遺跡』・『八丁堀三丁目遺跡Ⅱ』(以上, 中央区), 『本所御蔵跡・陸軍被服廠跡』・『江東橋二丁目遺跡Ⅱ』(以上, 墨田区)などの調査報告書が刊行された。

城郭・城下町に関しては, 豊前小倉城(『小倉城代米御蔵跡Ⅲ』), 入吉城跡(『史跡入吉城跡Ⅺ』)。金沢城下の昭和町遺跡(『金沢市文化財紀要』194)と本町一丁目遺跡(『同上』195), 福島県三春城下町(『近世追手門前通遺跡群E地点』)などで調査報告書が刊行された。

菊地信吾は, 「近世・堀越城跡から弘前城跡への歴史景観」(東北中世考古学会編『遺跡と景観』), 「津軽氏城跡の研究」(『地域考古学の展開—村田文夫先生還暦記念論文集—』)で, 進行中の発掘調査成果と絵図面・古文書を重ね合わせ, 津軽氏の居城のひとつ堀越城跡の景観復元を試みている。

窯業以外の生産遺跡では, 『考古学ジャーナル』487の鉱山特集で, 「甲斐の諸金山」と「鳥根県石見银山」が紹介されたほか, 『新潟県考古学会連絡誌』54の佐渡金山関連遺跡の調査など, 鉱山遺跡が目された。福島県白河城下では, 江戸時代後半から昭和にかけて操業していた精米用の水車跡とそれに伴う水路跡が調査されている(『谷津田川流域水車跡群発掘調査報告書』)。熊本県中央町では, 文政2年頃に作られた水路橋の測量が行われている(『風呂橋・貫井手調査報告書』)

4. 信仰・葬送墓制・人骨などの調査研究

信仰に関しては, 追川吉生「江戸時代の胞衣埋納に関する一考察」(『東京考古』20), 坂本 彰「胎盤埋納の終焉」(『地域考古学の展開』), 関口慶久「近世の地鎮」(出土銭貨研究会第9回大会発表資料『中世の地鎮と銭貨』)がある。追川論文は, 江戸の胞衣埋納遺構について検出場所, 規模や形態, 共伴遺物などを整理するいっぽう, 江戸時代の儀礼書・便利書・日記・風俗書・医書などに胞衣埋納記録を求め, かわらけを用いる点に江戸の地域の特徴があることや, 大部分が19世紀に属することなどを明らかにした。坂本論文は1950年代に横浜市郊外で行われた胎盤埋納と東京都内の医療施設における胎盤処理を紹介し, 胎盤埋納は医療施設内分娩が一般的となった1950年代を境に行われなくなったと述べた。

墓制は, 近世考古学の分野でも近年とみに研究の進展が著しい分野の一つといえる。殊に考古学の側からは近世の墓標に注目が寄せられ, その歴史資料としての重要性が認知されつつある。墓標研究会では, 朽木 量「欧米における墓標研究の歩み」, 谷川章雄「近世墓標の普及をめぐる」, 土居 浩「今これからのための墓の過去」, 田中藤司「墓を語る断絶と接合」の4報告があった(『墓標研究会会報』6・7)。

「中近世石造物と社会」が特集された『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』10には, 近世墓標に関する2本の論文(朽木 量「近世墓標からみた京都南山城地域の社会的繋がり」, 時津裕子「近世墓標研究の射程」)がある。前者は, 京都府南山城地域の郷墓における墓標の形態と石材の変化と変異を基に, 墓地ごとの個別性をあぶりだし, 南山城という「地域社会」内において潜在的な差異が生まれる背景について考察した。後者は, 近世墓研究において「家の成立」と「脱仏教化」という解釈の視点が既にパラダイム化していると指摘した上で, 近世墓研究が向かうべき方向性について論じる。また, 朽木 量「近世墓標の考古学的分析からみた江戸近郊の寺院」(『江戸遺跡研究会会報』90)は, 神奈川県平塚市の曹洞宗真芳寺における近世の墓標と過去帳の分析に基づき, 江戸近郊の寺院付墓地が当該寺院の地域的社会的地位

づけ・役割に影響されながら成立していると論じた。いっぽう、弘前大学人文学部文化財論ゼミナールは、弘前藩の港町の一寺院に遺された過去帳と墓標との照合を行う中で、墓標を建立し得た人々の階層を明確にし、墓標のみから歴史復元を行うことの危険性を指摘した（『津軽十三湊湊迎寺過去帳の研究』）。熊本大学文学部日本史研究室による熊本県中央町の金石文遺物の調査報告は、苗字を得たことが個人墓の造営と家単位の墓域の占有化を促進し、有力農民・商人による墓地の共有化に帰結すると論じた（『石は語る』）。

近世墓の調査事例では、金沢市野田山墓地（『金沢市文化財紀要』200）、東京都中央区八丁堀三丁目遺跡（『八丁堀三丁目遺跡』Ⅱ）、栃木県茂木町登谷遺跡（『登谷遺跡』）、岩手県東館遺跡・五合田遺跡（『前沢町文化財調査報告書』14）が注目される。

近世大名墓については、日蓮教団の中樞寺院に営まれた近世前半の大名墓の実態が明らかとなった立正大学文学部考古学研究室による『池上本門寺近世大名墓所の調査』と、関根達人「近世大名墓における本葬と分霊」（東北史学会編『歴史』99）がある。後者は、大名墓を本葬墓と分霊墓に分けた上で、墓標・埋葬施設・副葬品を指標に大名墓の変遷を跡づけ、それを基に大名の質的变化を考察した。

鍋被り葬に関しては、桜井準也による日本考古学協会での研究発表（前掲）に加え、関根達人「鍋被り葬考」（『弘前大学人文学部人文社会論叢』人文科学編9）がある。関根論文は、東北地方の事例から鍋被りの対象を検討するとともに、その系譜を中世後期北日本の葬制と鉄鍋を用いた祭祀とに求めた。

埋葬人骨そのものに関しては、谷畑美穂「近世埋葬人骨を用いた骨考古学的研究」（『人類史研究』13）、同じく谷畑による日本考古学協会での研究発表（前掲）などがある。谷畑論文は、性・年齢・疾病など出土人骨に関わるデータと埋葬施設や副葬品などの考古学的データを組み合わせた「骨考古学」を提唱する。長岡朋人・熊倉博雄「旧吉原墓地（大阪市）から出土した近世人頭蓋の形態的特徴」（『Anthropol. Sci.人類誌』109—2）は、大阪市北区の旧吉原墓地から出土した18世紀末から19世紀初頭の人骨にみられる短頭性について、中世以後の都市化の影響が強く関わっていると指摘する。このほかにも、円形木棺の法量と被葬者の年齢との関係を論じた田口哲也「近世墓の基礎研究」（『博望』2）や、安里進・佐伯信之「沖縄県浦添市の近世墓調査」（『考古学ジャーナル』498）など数多くの葬制に関する研究報告が発表された。

5. 陶磁器・土器・漆器・瓦・銭貨などの調査研究

東洋陶磁学会から30周年記念として『東洋陶磁史—その研究の現在—』が刊行された。近世の国産陶磁器に関連しては、井上喜久男「近世の瀬戸・美濃」、伊藤嘉章「楽焼—桃山時代の初期楽焼について—」、大橋康二「肥前陶磁器研究の成果」、林屋晴三「古九谷論争の軌跡と伊万里初期色絵」、河原正彦「近世色絵陶器の成立」といった論考に加え、井上喜久男「名物瀬戸茶入の考古学的再検討」と、永田信一「洛中出土の茶陶について」の2本のコラムが掲載されている。すべてに共通していえるのは、陶磁研究における考古資料の比重の高まりであり、殊に軟質施釉を特徴とする初期京焼に関してはその感を強くする。『東洋陶磁』31では、近年資料の蓄積が著しい東北地方近世城跡における陶磁器の様相が再確認された。

瀬戸・美濃焼関連では、国史跡元屋敷窯の整備に伴う調査報告（『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』）が注目される。今回の調査では大窯第3段階後半（16世紀後半）から第4段階後半（17世紀初頭）に到る大

窯の構造と器種の変遷が明らかになるとともに、後続する連房Ⅰ期の元屋敷窯が、慶長年間中頃から末葉の短期間、茶陶や懐石具など付加価値の高い製品を特徴とする生産を行っていたことが確かめられた。

相羽重徳「越中瀬戸広口壺に関する粗描」(『新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』4)は、新潟県内の資料を中心に資料集成をはかり、変遷案の提示と流通状況に関する考察を行った。

肥前陶磁器関連では、鍋島の実態解明が進んだ点が注目される。鍋島藩窯研究会からは、昭和51・52年度の発掘成果と昭和27年調査資料の一部を報告した『鍋島藩窯』が刊行され、東中川忠美によりその技術的特徴が考察された。また、第13回九州近世陶磁学会では、消費地ならびに生産地の出土資料の検討に基づき、鍋島の生産と流通に関する基礎的な確認作業が行われた(2003年2月『鍋島の生産と流通』)。消費地出土の肥前陶磁を扱った論考としては、城間 肇「沖縄出土の肥前陶磁の様相」(『琉球大学考古学研究集録』4)、永井正浩「堺出土の17世紀伊万里焼資料」(『博多研究会誌』10)、生産地側のものでは中野雄二「18世紀中葉～19世紀中葉の肥前染付」(『関西近世考古学研究』X)がある。

日本陶磁協会刊行の『陶説』593では越前焼の特集が組まれ、近世越前焼播鉢の編年案が提示されるとともに流通状況が検討された(木村孝一郎「近世越前焼の生産動向に関する覚え書き」)。また、金沢市野田山墓地の調査報告においても、墓碑の年号に基づき蔵骨器として使われた越前甕の編年が示された。

備前焼については第5回備前焼研究会による「備前大甕25年毎編年作業」、丹波焼については川口宏海「近世丹波焼の壺・甕の変遷について」、信楽焼に関しては畑中英二「近世後期信楽における陶器生産」(以上『関西近世考古学研究』X)などの論考がみられた。

地方窯に関する研究も盛んで、北茨城市内の窯跡資料を基に手綱焼・松岡焼を紹介した瓦吹 堅「窯はどこにあったの」(『國學院大學考古学資料館紀要』19)や柏本朝子「萩における磁器生産について—小畑焼その1—」(『萩市郷土博物館研究報告』12)、日下正剛「大谷焼の生産と流通」・仲野泰裕「尾張地方の磁器生産」・森 恒裕「東山焼—姫路城下町出土資料の検討—」・中村貞史「南紀男山焼」・前川浩一「和泉音羽焼」・石神由貴「三田焼について(窯跡出土資料より)」(以上『関西近世考古学研究』X)がある。

陶磁器の組成を扱ったものとしては、今井さやか「17世紀城下町の陶磁器組成—名古屋城三の丸遺跡を例として—」(『新潟考古学談話会会報』25)、森本伊知郎「近世陶磁器の数量把握について」(『相山女学院大学研究論集』34)などがある。森本論文は、港区白金館址遺跡出土陶磁器を例に、総破片数、総重量、口縁部破片数、個体数、以上4種類の算定方法によって導きだされる組成比を比較検討している。

ほかに陶磁器に関しては、津軽十三湊出土の近世陶磁器と絵図面の検討から港町の変遷を論じた関根達人「江戸時代の十三湊」(『海と考古学とロマン』)、池田悦夫「近世磁器染付皿の高台圏線について」(『地域考古学の展開』)、細川佳子「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の中国製陶磁器」(『伊丹郷町通信』10)、川稲原昭嘉「明石城武家屋敷に見る18・19世紀の器種構成について」(『関西近世考古学研究』X)がある。

土器研究では、小川 望「注口状の突起を有する灯火具」(『物質文化』73)、同じく小川による「筒状の芯立をもつ灯火具(1)」(『江戸在土器の研究』V)などがある。

瓦の研究では、熊本県妻島城跡出土の李朝系瓦や金箔瓦・桐文鬼瓦の検討を行った山内淳司「妻島城跡出土の瓦」(『織豊城郭』9)、堺産瓦の年代を検討した佐々木志穂「高知城伝下屋敷跡出土瓦について」(『四国城下町通信』11)、越後高田城の赤瓦(施釉瓦)を生産した2基の連房式登窯が発掘された新潟県上越市の堀向瓦窯跡の調査報告(『上信越自動車道関連遺跡調査報告書』IX)が注目される。

漆器研究では、自然科学的分析を基礎とする北野信彦による一連の研究（「出土漆器からみた国元城下町における武家地関連遺跡の一性格」『愛知大学総合郷土研究所紀要』47、「根来寺坊跡出土漆器の製法について」『和歌山県立博物館研究紀要』8、「出土漆器資料からみた近世初頭から前期における上方三都居住者の一性格」『くらしき作陽大学研究紀要』35—1、「出土漆器からみた北海道蝦夷地における近世アイヌ社会の一性格」『同上』35—2）がある。『考古学ジャーナル』489ではアイヌ社会の漆器が特集された。

銭貨に関しては、『出土銭貨』18において「清朝銭の出土状況」の特集が生まれ、17世紀後半～18世紀の鎖国期に長崎を通して少量の康熙通寶がもたらされたが、国内出土の清朝銭の多くは、幕末～明治初期に移入された可能性が高いことが再確認された。須田久仁彦「六道銭と銭貨の品質」（『地域考古学の展開』）は、墓に銭を納める際、銭経や厚みによる「撰銭」が行われた可能性を指摘する。

出土文字資料を扱ったものには、田中一穂「青海町寺地遺跡出土木簡に関する補論」（『新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』4）や越村 篤「墨書『十二の娘』」（『東京考古』20）がある。小野哲也「中世・近世における鉄鍋の製作方法について」（『物質文化』74）は、出土品の解釈に民具研究の成果を用いる。

6. 海外交渉関係

坂井 隆『港市国家バンテンと陶磁貿易』（同成社）や、櫻井清彦・菊池誠一編『近世日越交流史—日本町・陶磁器—』（柏書房）は、消費地の陶磁器を中心に17世紀の東アジア社会の文化交流を論じる。中国古窯研究会が漳州窯確認10周年を記念して開催したシンポジウムでは、森村健一による景德鎮窯系青花と漳州窯系青花の製作技術の比較や、高桑 登による北海道・東北地方出土の漳州窯系磁器の集成がなされた。

小林 克編『掘り出された都市』（日外アソシエーツ）は、遺跡から出土する陶磁器やクレイパイプなど日本とオランダとの間で交わされた物に始まり、その交流が両国の食・住文化に与えた影響について検討し、さらには江戸・アムステルダム両都市の比較をも試みた内容となっている。

7. 近・現代史研究

従来ともすれば近現代を対象とした考古学は、「産業考古学」や「戦跡考古学」のように、特定の主題に限定されるか、もしくは先史・歴史考古学に必要な仮説の構築や理論の検証のための「実験場」といった扱いを受けてきた感が否めない。しかし近年、近現代遺跡の調査が蓄積するに従い、近現代史研究のひとつの方法として認知されつつあるものと思われる。

東京都中央区では、明治初年の築地外国人居留地跡が調査された（『明石町遺跡』、仲光克顕「掘り出された築地外国人居留地」『築地居留地』2）。墨田区陸軍被服廠跡の調査報告では、出土した近代の陶磁器や日露戦争頃の多量の木簡に関する考察がなされている（『本所御蔵跡・陸軍被服廠跡』）。

小林謙一・渡辺貴子「物質文化研究としての近現代考古学」（『東京考古』20）は、目黒区大橋遺跡の旧日本陸軍駐屯地出土のガラス容器を報告するとともに、近現代考古学の特質や現状、課題などを論じた。

十菱駿武・菊池 実編『しらべる戦争遺跡の事典』（柏書房）は、「戦争遺跡」を、「近代日本の戦略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内国外で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地」と定義する。そして、それら戦争遺跡やそこで使われた各種の遺物を紹介す

るとともに、戦争遺跡や遺物などを調査・研究するために役立つ情報を提供する。戦争遺跡・遺物の考古学的調査・研究が、今後日本の近代史研究に大きな影響を与えることを予感させる好著といえよう。

これまで近・現代史研究における考古学の貢献はどちらかといえば、東京をはじめとする大都市あるいは沖縄に代表される戦跡・軍事施設に限られてきた感がある。そのなかで三浦の塚研究会によって行われた神奈川県三浦半島に所在する近現代に営まれた貝塚の発掘調査は、考古資料に基づき都市近郊漁村における生活様式の変化を追求しようとする試みとして注目されよう（三浦の塚研究会『漁村の考古学』、桜井準也「近世・近代考古学と生活財研究」『民俗考古』6、三浦の塚研究会「塚と地域社会」『同上』）。

おわりに

近世考古学研究は、陶磁器をはじめとする遺物を用いた分野では多くの成果が発表されたが、遺構論に関しては、墓制を除けばあまり振るわなかった。遺構・遺物ともに基礎的な考古学的データは着実に蓄積されている。文献史・建築史・民俗学など関連する諸学問は、近世や近代の考古学にとって遺構・遺物の解釈に必要なミドルレンジ研究にほかならない。それらとの共同作業を通じ近世・近代の歴史叙述でも考古学が大きな役割を果たし得ることを示す必要があろう。